

Syndrome

鍵宮富雄(GIGANT GIGS)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初のきんいろモザイクとなりの吸血鬼さんの2次小説。緩い百合は最高！

S  
y  
n  
d  
r  
o  
m  
e

目  
次

# S y n d r o m e

I.

忍「綺麗な金髪……アリスでもカレンでもなさそうですね」

エリー「困ったわね、この辺りに住んでいるはずなのに」

忍「ハ…ハロー？」

エリー「あら、あなた見た目は和風だけど英語を話せるのね」

忍「い、いえ。得意なのはハローだけなので日本語でお願いします」

エリー「わかったわ。それで私に何か用？」

忍「困っているように見えたのでつい話しかけてしまいました」

エリー「友人に会い来たけど、道に迷っていたから助かるわ。この辺に住んでるソフィーって名前の子、知っているかしら？」

忍「聞き覚えのないお方ですね。住所はありますか？」

エリー「伝から聞いたこの文字列のことかしら」

忍「その住所なら4つほど曲がった先のお屋敷だと思います。せつかくですので案内しますよ」

エリー「あら、案外近かったのね。あなたがいてくれて助かったわ」

II.

エリー「あなた美味しそうね、名前は何て言うのかしら？」

忍「私は大宮忍と申します。みんなからはシノと呼ばれています」

エリー「私はエリー。よろしくね」

忍「エリーもイギリスから来たのですか？」

エリー「最近では疲れて寝ていたけど、前まで世界中を旅していたわ」

忍「私はこの街を飛び出しイギリスや世界を観て回りたいたのでエリーが羨ましいです」

エリー「…郷土は大切にしないよ」

忍「…？もちろんです」

III.

ピンポーン

ソフイー「ん？特に通販は頼んでいないはずだが…」ガチャ

エリー「ソフイー！！久しぶりね、何年振りかしら？」

ソフイー「…灯、何故コイツを連れて来た…？」

忍「いえ、灯ちゃんではないですよ。私は大宮忍と申します」

ソフイー「申し訳ない。寝起きで知り合いと見間違えてしまったよ  
うだ」

忍「エリーが道に迷っていたので私が案内したのです。ひよつとし  
て連れて来てはご迷惑でしたか？」

ソフイー「エリーだけなら追い返したところだ。君、随分礼儀正し  
いな。エリーにも分けてやりたいぐらいだ」

エリー「ソフイーったらつれないわね。久しい友人に対する態度  
じゃないわよ」

ソフイー「私は君を友人だと思ったことは一度もない。騒がしい隣  
人だ」

エリー「隣人を愛してこそ…」

ソフイー「あいにく私たちには無縁な言葉だ」

IV.

ソフイー「忍もいるし、立ち話では客人に失礼だ。入りたまえ」

忍「私も宜しいのでしょうか？」

エリー「気にすることはないわよ、ソフイーの家は片付けが行き届  
いて落ち着くわ」

ソフイー「何故エリーが答える…。必要最小限あれば良いからな、  
散らかった部屋は好きではない」

忍「素敵な洋館ですね…お伽話に出て来そうな雰囲気です」

ソフィー「ふふ、お伽噺か。それは嬉しいな」

エリー「どちらかと言えば推理小説モノのお屋敷じゃないかしら」

忍「そんなわけありません！この部屋だって優美な飾り付けがされていきますよ」ガチャ

ソフィー「待った！その部屋は?!」

パタン

忍「勝手に開けてごめんなさい…」

ソフィー「いや…良いんだ。捨て切れないモノを溜め込んでしまった私の不甲斐なさが原因だ」

V.

ソフィー「そのソファでくつろいでいてくれ、お茶を用意する」

忍「ソフィーもエリーも外国のお嬢様なんですか？」

エリー「そうね…ある意味では名の知れた存在だったわね」

忍「そうなんですか！2人共とても綺麗で、特にエリーの金髪は一度梳いてみたいです!!」

エリー「良いわよ？お風呂上がりに髪を整えるのをお願いしようかしら」

忍「任せてください！エリーにピッタリの髪型にしてみせます」

ソフィー「なんだ泊まる気か？エリーはともかく、忍は親御さんが心配するのではないか？」

忍「そうでした…すいませんソフィー、電話を借りても良いですか？」

ソフィー「良いぞ。今時の高校生で携帯電話を持ち歩いていないとは珍しいな」

VI.

忍の母『はい、大宮です』

忍『あ、お母さん？今日お友達の家泊まっても良いですか』

忍の母『あら、珍しいわね。誰と泊まる予定なの？』

忍『最近知り合ったソフィーとエリーです』

忍の母『聞いたことない子ね…2人はどんな感じの子なの？』

忍『ソフィーは銀髪の淑やかな女の子、エリーは金髪で賑やかな女の子です』

忍の母『あらあら、金髪少女に銀髪少女とは…それならオツケーよ。』

今度うちにいらっしやい、いつでも歓迎するわ』

忍「お母さんに聞いてみたらオツケーでしたので大丈夫です」

ソフィー「…灯の時もそうだったが、最近の親御さんの間ではこの対応が普通なのだろうか…？」

## VII.

忍「ソフィーもエリーもトマトジュースが好きなんですネ、ティーセットまであるのに少し意外です」

ソフィー「なんだ、エリー。話していなかったのか」

エリー「相容れないならそれまでのこと。所詮は人間、正体を知れば掌を返して逃げ出すわ」

忍「あの、すいません…お二人が何を言っているのかよくわからないです」

エリー「人間のお嬢さんよく聴いて。私やソフィーは吸血鬼なの。血を啜り、空を飛び、人々を恐怖に落とす存在よ」

忍「そうだったんですか。まさか吸血鬼を目にするとは思わなかったです」

エリー「…？私の言葉を嘘だと思ってる？」

忍「私にとって吸血鬼はずっと御伽噺の存在だと思っていましたですがこうしてソフィーやエリーのような素敵な方々と知り合えるのならもつと町中に吸血鬼が居ても良いと思います」

エリー「口では何とでも言えるわ、だったらこうして襲われてもあ

あなたは平気なの？」

忍「や：優しくしてくださいね…。それともう少し抱き寄せ、見つめ合う感じをお願いします」

エリー「：風変わりな子ね」

ソフィー「安心しろ、今では忍や灯のような性格の子もいる。

吸血鬼を恐れる時代は廃れた、人間の友人も悪くないぞ」

#### VIII.

エリー「わかったわ、シノのこと認めてあげる。ところでさつきからソフィーが言う灯って誰よ」

ソフィー「私の家に一緒に住んでいる人間の少女だ。噂をすればなんとやら」

灯「ただいま！ソフィーちゃん。つてあれ？お客さんがいるね、お友達？」

ソフィー「おかえり、灯。知人のエリーと忍だ」

忍「大宮忍です、よろしくお願いします」

エリー「エリーよ。あなたはソフィーの召使いなの？」

灯「私は天野灯、ソフィーちゃんの友達と一緒に住んでいるだけだよ」

エリー「吸血鬼と知った上で言っているのかしら？」

灯「もちろん。ひよつとしてエリーちゃんも忍ちゃんも吸血鬼なの？」

エリー「あなたもちよつと変な子ね：私はソフィーと同じく吸血鬼よ」

忍「私は普通の人間ですよ」

ソフィー エリー「普通？」

#### IX.

灯「それじゃあ、晩御飯の用意をしてくるね」

忍「私も手伝います」



エリー「ソファイーあなた変わったわね」

ソファイー「そうか？そうだな…灯といると毎日が騒がしくて少しウンザリだ」

エリー「自覚はないのかしら…あなたと長年一緒に居たけど、そんな顔見たことないわ」

ソファイー「…」

エリー「少しあの子に嫉妬しちゃうわね」

ソファイー「エリー、今は昔とは違う。日の目を見ると灰になるが闇に隠れて生き延びる時代ではない。灯や忍も吸血鬼と知っても尚、友好でいてくれる」

エリー「それはあの子達が特殊なだけよ」

ソファイー「灯の友達のひなたも私のこと恐れず、友達だと言ってくれた。

エリー、君も人間と仲良くできないか」

エリー「…そうね。2人を見ていると深く考えてる自分がバカみたいに思えてくるわ」

ソファイー「…！それなら」

エリー「良いわよ、面白い人間なら仲良くしてあげる」

X.

エリー「それにしても、私が眠っている間に随分栄えたみたいね。見慣れない道具が一杯だわ」

ソファイー「どれも役に立つ、今では毎日の生活に欠かせないものだ」

エリー「その膝の上に乗せてあるのは。何かしら？」

ソファイー「これはパソコンだ。世界中の人に繋がることのできる道具だぞ」

エリー「この小さいお人形、精巧な作りをしているわね」

ソファイー「それはフィギュアだ、壊れやすいからあまり触らないでくれ」

エリー「ふーん…。そのフィギュアってのは何の役に立つの？」

ソフイー「それを見るたび過ぎ去った作品を詳細に思い出せる。また、殺風景を彩り、意欲が湧くぞ」

エリー「そんな多機能なインテリアがあったのね、私も家に飾ってみようかしら？」

ソフイー「ある程度の知識を取り入れてからの方が効果がある。今度お勧めの作品を紹介しよう」

XI.

灯「ソフイーちゃん、エリーちゃん。そろそろ出来上がるからみんなで食べよう」

「わかった」わ」

忍「灯ちゃんは手際が良いですね。いつも調理をされているのですか？」

灯「小さい頃からお母さんのお手伝いをしていたからかな？ソフイーちゃんと暮らしてからは三食と弁当も作らなきやだし」

エリー「人間は毎回料理をする必要があつて大変ね」

ソフイー「その点血液で済むのは楽だ、色々工夫しなきや飽きてしまうがな」

エリー「それはあなたが人間から直接吸血しないからよ。大体瓶詰では吸った相手が誰なのかわからないじゃない」

ソフイー「それなら顔写真付きで提供者がわかる。それはこの子だ」

エリー「便利な世の中ね…結構好みかも」

灯「私も提供すればソフイーちゃんに飲んで貰える…！」

ソフイー「おい、やめろ」

XII.

エリー「ソフイーにあげるぐらいなら私に頂戴」

灯「し…仕方ないなあ…。ちよつとだけだよ？」

ソフイー「ふ、2人とも食事中にはしたくない真似するな！」

エリー「あら？吸血鬼にとってこれは立派な食事よ」

忍「灯ちゃんだけズルいです！エリー、私の血を吸ってついでに髪を梳かさせてください」

灯「忍ちゃんの頼みでもこれだけは譲れない。私が先に人形のようなエリーちゃんのお肌を堪能するの！」

忍「いえ、先にエリーと知り合ったのは私です。ですから先にやわ肌のような唇から吸われる権利は私にあります」

灯「そんなの詭弁だよ。エリーちゃんから望んできたことだから私が先！」

忍「それなら灯ちゃんが帰って来る前に一度吸血されかけた私に利があります。さあエリー、あの時の続きをお願いします」

エリー「ごめんなさい。2人からは血を吸いたくない…」

「どうして!?!」

XIII.

「しゅん…」

ソフィー「何故団欒からこの世の終わりのような雰囲気になっっているんだ…」

エリー「シノはどうしてそこまで私の髪に拘っているの?」

忍「小さい頃から外国に憧れがありました。金髪少女の魅力に強く惹かれたのは中学時代、イギリスのホームステイ先でアリスに出会ってからですね」

灯「中学でホームステイしたの!? 凄い行動力だね」

エリー「ちよつと、私のことを少女だと思ったら大間違いよ。この場の誰よりも最年長なんだから」

ソフィー「私が…340歳ぐらいでエリーは私より100歳程年上だ」

灯（吸血鬼でも鯖読むんだ…）

忍「やっぱり吸血鬼は長生きなんですネ。でも、そのおかげで本来出会えなかった時代の方々とこうしてお話して嬉しのです」

灯「忍ちゃんの言う通り、私もソフィーちゃんやエリーちゃんによ

うな不思議なお友達と巡り逢えて幸せだよ」

エリー「…あなた達のような子が隣にいたらもう少し楽しい時代を送れたのかもしれないわね」

ソフィー「エリー、君が100年眠りに就いた訳は…」

エリー「気に掛けないで、ソフィー。昔のことだから」

XIV.

「御馳走様でした」

灯「お風呂入れてたけど誰から入る？」

忍「エリー。一緒に入りませんか？」

エリー「御断りするわ。だけど約束だし、お風呂上がりに髪を梳かせてあげる」

忍「本当ですか!?!ありがとうございます!!」

灯「ソフィーちゃん、私たちも一緒に…」

ソフィー「断る」

灯「まだ言い終わってないのに…!」

ソフィー「それに食後直ぐに風呂に入るのは健康や寿命に良くない、少し休んでから入りなさい」

エリー「人間ならともかく、吸血鬼のあなたが寿命を気にしてどうするの…」

XV.

忍「なんて眩い…しかもこの手触り…エリーは本当に可愛くて綺麗ですね」

エリー「そ…そう?ありがとうございます。でもシノの金髪好きのきっかけとなったのはアリスって子よね」

忍「強く意識し始めたのはその頃からです」

エリー「その子と私、どっちが好き?」

忍「エ、エリーなんて残酷な質問をするのですか…」

エリー「ふふ。私、選ばれなかったら泣いてしまうかもしれないわ」

忍「優劣を付けるなんてできません。アリスもエリーも掛け替えのない私の友達。みんな違って、みんないいんです」

エリー「シノ…眩しいから少し離れて」

忍「まだ結び終わってないですよ」

XVI.

ソフィー「私たちはこれから自由時間だが、人間はそろそろ眠る時間ではなかったか？」

灯「そうだね、私たちはそろそろ眠るね。おやすみー」

忍「おやすみなさいソフィー、エリー」

エリー「また明朝に会いましょう」

ソフィー「そういえばエリーも泊まるんだったな、部屋は2階の突き当たりを使ってくれ」

エリー「わかったわ。それにしても人間の少女に振り回されるとは思わなかったわ」

ソフィー「見てる分には面白かったぞ、エリーは2人に慕われていたじゃないか」

エリー「慕うと言うより人形だったり金髪だったり理想の押し付けに見えたのは気のせいかしら」

ソフィー「それはあるかもしれないが、好意であることは間違いない。恐れを抱いてたり嫌いな相手にはしない態度だ」

エリー「人間から恐れられる時代を羨む日が来るとは思わなかったわ」

ソフィー「…君はわかりやすいな。本当の気持ちを偽っているだろう」

エリー「なによ、いきなり」

ソフィー「さつきからずっと満ち足りた顔をしていたぞ」

XVII.

ソフィー「さて、朝が来るまでに夜風に当たりながら散歩でも行ってくるか」

エリー「珍しいわね、あなたが外に出るなんて」  
ソフィー「ここは平和だからな、在らぬ疑いを掛けられることもない」

エリー「夜に吸血鬼が彷徨くだなんて、この辺りの人間が心配だわ」  
ソフィー「私が人を襲うことはない。それに、近所の人からは私が心配される立場だ」

エリー「吸血鬼の威厳も地に落ちたものね」  
ソフィー「地上の人間と手を取り合えるなら喜んで地に落ちようではないか」

エリー「…本当に、変わったわね」

## XVII.

灯「ここが私の部屋だよ。忍ちゃん、一緒のベッドで寝よう」

忍「お人形さんを沢山飾っていますね、素敵なお部屋です」

灯「わかつてくれるの!?!みんなこの子達を怖がるから少し寂しかった」

忍「どれも素敵なお人形さんです。全部手作りなんですか?」

灯「半分以上はお母さんが作ってくれたの。最近では一人で作れるようになったよ」

忍「灯ちゃんはお裁縫が得意なんですね。私もよくドレスを仕立てたりしてました」

灯「そうなんだ!今度どちらがソフィーちゃんを引き立てる衣装を洋裁できるか勝負しない?」

忍「それならば私はエリーの洋服を仕上げますよ。今のエリーを更に魅力的に見せます」

灯「ふふ、私だって負けないよ」

エリー「何かしら…急に寒気がしたわ…」

ソフィー「奇遇だなエリー、私もだ…」

XIX.

忍「予期せぬ訪問にも関わらず泊めて頂きありがとうございます  
ございました」

ソフイー「気にするな、忍ならいつでも遊びに来てくれて構わない  
ぞ」

灯「忍ちゃん、また来てね！約束だよ」

忍「もちろんです」

エリー「あら、もう帰ったのかしら。少し残念ね」

ソフイー「君はいつまで居る気だ？」

エリー「昨夜帰るつもりだったのだけど、つい話し込んで忘れてた  
わ。今晚には戻るから、もう少し居るわ」

灯「夜まで一緒に過ごせるね」

エリー「悪いけどそろそろ眠いから、寝るわ」

ソフイー「私もだ。おやすみ、灯」

灯「ソフイーちゃんもエリーちゃんも眠る時間だったね、おやすみ」

XX.

忍「あの後ろ姿は……アリス!!」

アリス「シノ……!」

忍「会いたかったですよ、アリス」

アリス「シノ……どこに行っていたの」

忍「友達のお家に泊まりに行ってみました」

アリス「シノママから聞いたのだけど、その友達って金髪少女って  
本当？」

忍「泊めてくれたのは銀髪のソフイーでその子の知り合いが金髪の  
エリーです。2人ともとっても可愛らしかったですよ」

アリス「……!もう知らない!シノのバカ!!スケコケシ!!!」

忍「そ、そんなアリス……どうして?ま、待ってくださいアリス!置  
いてかないでください!」

e  
n  
d.